慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	蘇暁康・王魯湘編 (辻康吾・橋本南都子訳)『河殤』
Sub Title	Su Xiaokang and Wang Luxiang, Heshang - The river dies young
Author	国分, 良成(Kokubun, Ryosei)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1989
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.62, No.10 (1989. 10) ,p.109- 113
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19891028-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

蘇暁康・王魯湘編（辻康吾・橋本南都子訳）

『河　殤』

一

一九八九年四月、中国において学生を中心とした大規模な民主化要求運動が生起した。これは、かつて民主化に前向きの姿勢を示したために、中国共産党総書記の地位を解任された胡耀邦の死去を契機に始まった。そして五月中旬のソ連のゴルバチョフ訪中の真最中に、北京のデモは百万人規模に膨れ上がった。折しも世界各国から集まった報道陣は、北京の天安門前で繰り広げられる学生・市民による異議申し立て行動を、あらゆるメディアを通じて全世界に伝えた。しかし五月二〇日、危機を感じた当局は北京市に戒厳令を発し、その後六月四日にはついに銃弾でもって運動を鎮圧した。この当局の行為もまた、各国のマスコミに実況生中継され、中国は国際的な非難を浴びることとなった。こうして、強圧的な方法で民主化運動は押さえつけられ、学生・市民の要求は力の論理で葬り去られた。

ここに取り上げる『河殤（かしょう）』は、今回の学生運動の理論的支柱ともいえる重要な文献である。本書はもともと一九八八年夏に中国のテレビで放映されたものの、その後その内容をめぐって大論争が巻き起こり、再放映禁止となったドキュメンタリー番組のシナリオである。このシナリオもまた、中国において単行本として出版された数ヵ月後には発売禁止となった。

『河殤』のシナリオは、中国の若い知識人たちによって執筆された。編者は一九四九年生まれで北京放送学院新聞学科教員の蘇暁康と、一九五六年生まれで北京師範大学教員の王魯湘である。これ以外にも、中国の歴史社会論の若き理論家金観濤や、経済改革の著名な理論家で北京大学教授の厲以寧らも、その制作過程に深くかかわった。本書には、中国の現実、特に中国の封建的体質の根強さに対する若手理論家たちの強烈な危機意識が色濃く反映されている。これは、中国の若い知識人の焦りにも似た悲痛な叫びともいえる。この訴えかけは、今回の一連の事態を通して、中国における長老の政治支配の実態が明らかになることによって、現実にその正当性が一部立証されたとも言えるのである。

『河殤』の「河」は中国の黄河を指し、「殤」とは若くしてこの世を去り墓に葬られなかった人々のことや、異郷で死んだものの故郷に葬られなかった人々のことを指す。つまり『河殤』とは、黄河文明の歴史のなかでの殉教者を意味する。言い換えれば、ここでは、中華文明の発祥地である黄河文明の歴史を極

めて現代的な視角から分析することにより、その衰退の歴史的過程を悼みながらも、批判的に跡づけることを意味しているのである。要するに本書は、今日的視点に基づいた、中国の歴史と伝統に対する過激なまでの批判と警告の書なのである。

二

本書の序とも言うべき「全民族の反省を呼び掛ける」のなかで、蘇暁康はこのドキュメンタリーの全体的な構想について言及している。彼によれば、ここでは黄河を一種の観光案内の形式ではなく、現実社会との接点のなかから黄河にまつわる文化哲学的なテーマを取り上げ、現在の中国社会が抱える政治・社会的問題についての議論を提起しようとしている。しかもここでは、現在の中国の若く先鋭な思想家にシナリオを執筆させ、また実際に彼らをこの番組に登場させることによって、ドキュメンタリーのもつ思想性と感性を鋭敏なものとさせようとしているのである。ここでの全体を通してのテーマは、蘇の考えを要約すれば、現在中国で行われている近代化と体制改革の過程で、中華民族の伝統文化はプラス要素となりうるのか、またはマイナス要素となるのか、という点に集約できるように思われる。

本書は全部で六部に分かれている。第一部「夢を追う」もまた蘇暁康によって書かれた部分である。ここではまず、中華民族の起源を解明することから説き始めている。中華民族のルーツについていえば、彼らは黄河に染め上げられた黄色人種であり、荒々しい黄河にも似た竜がその象徴であった。つまり黄河こそが中華民族の起源なのであった。この黄河によって育て上げられた中華民族は、歴史のなかで世界に冠たる中華文明をつくりあげた。しかしこの栄光の歴史も清朝の康熙帝以後衰退の一路を辿り、近代の工業文明とは無縁となった。蘇によれば、「文明が衰退した根本的原因は外部の力による衝撃ではなく、内部構造の退化」であった。そしてこの「退化」は、中華文明において封建的社会構造が非常に強靱なことによるものであった。蘇の発想のなかには、中国社会の特質として、「アジア的生産様式」の観点が見え隠れしている。いずれにせよ、こうした強烈な中華文明批判から第一部の結びとして、「私達が創造しなければならないのは、斬新な文明」であり、それは「黄河の流れから生まれることはありえない」と説いている。そしてそれを生み出す力は、若干短絡的ではあるが、工業文明に他ならないと結論づけている。

第二部「運命」は、もう一人の編者の王魯湘によって執筆された部分である。中国は伝統的に自らを世界の中心と考えてきた。したがって中国は歴史的に外の世界へ向けて開放してゆく思考が成立せず、閉鎖的な社会を維持してきた。しかし現代世界のなかで、中国は今や世界の「中心」ではなく「一員」となった。中国にとって「これは苦痛に満ちた、だが賢明な選択であった」。王によればこの選択は、「歴史の運命」であった。中国の今後のあるべき道は黄河文明にしがみつき続けることでは

なく、黄河が最後には海に注ぐように、「科学と民主の新しい朝日を迎え入れる」ために、対外開放をすすめなければならない。以上がこの部分の主旨である。このように第二部も、第一部同様に中国の伝統的体質、ここでは特に中華思想の排他的な自己中心的想に警鐘を鳴らしているのである。

第三部「きらめき」もまた王魯湘により書かれた部分である。ここでは、主として中国の科学・技術の歴史とその現在的位相、および今日でもなお報われない地位にある知識人の重要性について述べている。中国における科学・技術の発展は、宋代において最も顕著であった。この時代を前後して、中国では製紙技術、活字印刷術、羅針盤、火薬を次々と発明し、これらの先進的技術を西洋に伝えた。中華民族のこうした発明は、ヨーロッパではその封建社会を打ち崩すのに多大な貢献をなした。しかしこの四大発明も、結局のところ本家の中国では封建社会を改造するのに何ら役に立たなかった。むしろ中国はその後、西洋の科学・技術の前に屈することになった。ここから筆者の王は、「このように聡明な民族が何故愚鈍になり老化してしまったのだろうか」、「私達がかつてもっていたものを今となって改めて発見するというのは、どういうことなのだろうか」、と厳しく自問している。この問いに対して中国科学院の劉青峰は、四大発明がいずれも通信、水利、軍事、官営手工業のような国家の大統一事業と関連していた、つまり封建社会を維持するための発明に他ならなかった、と指摘している。

三

張鋼と蘇暁康の二人の共同で書かれた第四部「新紀元」においては、現在中国は工業文明を打ち立てるための入り口に立っており、この道程は困難ではあるが必須のものであることが力説されている。ここでまず筆者たちは、なぜ中国の歴史に富の蓄積をめざした工業文明が登場しなかったのかについて考察している。彼らによれば、近代の工業文明はすなわち資本主義であり、中国がこの段階を経験しなかったことは「文明の失敗」であった。それでは中国はなぜ一貫して資本主義を拒絶してきたのか。それは、「中国文明の性質が決定したものであった」。すなわち、中国文明は黄河によってつくりだされた農業文明であり、しかもそこでは巨大な人口圧力の問題を抱えてきた。人口の急増は人間の質の低下を招き、「低い水準」の農業文明を再生産させてきた。したがって中国は、農業文明を抜け出て工業文明に邁進してこそ「二十一世紀へと進んで行くことができる」、と彼らは説く。これはつまり、中国は社会主義を捨てるべきだ、という意味を言外に含んでいるのであろうか。言うまでもなく、彼らはこれについての直接的な言及を避けている。

第五部の「憂い」も蘇暁康によって書かれている。ここでは、中国における自然と社会の「憂い」の相関性について論じられている。自然の「憂い」は黄河の度重なる氾濫の歴史に集約される。これまで黄河は、歴史上、「千五百九十回決壊し、河道

は二十六回大きく変わった」。中国における周期的破壊はこうした自然現象だけでなく、歴史的な社会現象でもあった。すなわち中国においては、繰り返し新しい王朝が誕生しては腐敗し、動乱が起き、崩壊し、そして別の王朝に取って代わられた。これは、中華人民共和国も例外ではない。文化大革命が良い例である。また今日でさえも、いわゆる現代化路線のなかで幹部の腐敗現象が蔓延しつつある。こうした現象は、「黄河に堆積される泥砂と同じように、……次第に危険を集積させている」。筆者によれば、これに対する唯一の救いは、経済改革と並んで政治改革が進められ始めたことであった。しかしながら、実際の進行状況が示しているように、政治改革は今日では遅々としているのが現実である。

最後の第六部「紺碧」の筆者は謝選駿と遠志明の二人である。ここでの「紺碧」とは海洋文明を指す。中国においては紺碧色、つまり海洋文明が歴史的に薄れ、閉鎖的な儒家の思想体系を基礎とした内陸文明が勝利した。彼らによれば、儒教文化は「数千年来民族の進取の精神、国家の法治秩序、文化的変革のメカニズムのどれ一つとして生み出すことはできなかった」。こうして中国の内陸文明は、「全民族に強大な文明の活力を根本的に与えることはできなかった」。「科学」と「民主」を掲げた一九一九年の五四運動ですら、結局のところ「封建主義の残滓を洗い流すことはできなかった」。彼らにとって、これはまさに社会主義中国の現在までも持ち越された問題であった。したがって彼らは、「中国の多くの事柄をすべて『五四』から改めて始めなければならない」と議論を導く。そして最後に、黄河が「紺碧」の大海へ注ぐように、もはや内陸文明を捨て去るべきであることを暗示している。

四

この訳書のなかには、辻康吾氏による「訳者あとがき」と、春名徹氏の解説が収録されている。辻氏は「あとがき」のなかで、『河殤』をめぐる中国での論争についての紹介とそれに対する私見を述べている。前述したように、この『河殤』はその後当局から公開禁止のレッテルを貼られたが、それはこれが中華文明を全面否定したものと当局の目に映ったからであった。辻氏は、この作品に見られる中華文明に対する痛烈な攻撃を民族主義の表れとみなし、むしろ現状の危機を克服して新たな中華文明の創出を企図したもの、と捉えている。確かに、ここに登場する若い筆者たちが強烈なナショナリストであることは明らかである。いわばその裏返しとして、彼らは過去の中華文明に対して攻撃的になっているのである。ただもう一つ本書が当局の怒りを買った重要な点は、ここでは社会主義中国について何らの評価もしていないことであろう。辻氏も指摘しているように、本書は一九四九年の新中国の成立をもって歴史を切断していない。本書においては、現代中国もむしろ伝統的中華文明の延長線上でしか捉えられていないのである。

春名氏の解説は『河殤』の議論の内容をコンパクトにまとめなおし、それぞれについて自らの観点から吟味している。このなかで氏は、冷静に本書の意義と問題点を整理している。意義としては、『河殤』が中国の歴史についての大胆な読みかえを試みていること、問題点としては、この議論が大衆を忘れた知識人の勇み足に見えること、歴史の内在的発展に対する評価が欠けていること、などを指摘している。

本書に対する評者なりの問題点を指摘しておこう。第一に、『河殤』の筆者たちの伝統的な中華文明に対する厳しい批判はあるが、かといってどのような新しい文明を創造するのか、そしてそれがどのような思想的基盤において構築されるのかについては、議論が乏しいということである。ここでは、もちろん世界に門戸を開いた海洋文明、そして工業化を基礎とした近代国家の創出という理念は読み取ることができる。しかしその具体的なビジョンは明確にされていない。もっともここから、西欧民主主義に対するある種の盲目的なあこがれを感じとることができる。中国が歴史的に西欧に学ばなかったことに対する批判が本書の底流にある、といっても過言ではない。

第二に、これと関連するが、中国の伝統的価値観の全面否定の上に真の近代化が達成できるのであろうか、という点である。工業文明に対する過度の信仰は、中国全体の八割を占める農村社会を見切り発車するということなのであろうか。ここでは、儒教に対する否定的評価が非常に根強い。しかし今や、アジアNIES諸国の経済発展のエトスとしての儒教に対する再評価が進行中であることもまた事実である。いずれにせよ、中国社会の歴史的風土や価値観を顧みずに、単に欧米への崇拝からほんとうに近代化が達成できるのであろうか、という疑問は残る。

第三に、春名氏も指摘していることであるが、本書の主張は知識人エリートの先走りの感があることは否めない。中国における知識人の社会的地位の低さからして、近代化における彼らの役割の重要性を説くことは充分に理解できる。しかし、本書では一般の人々の意識や存在はほとんど射程距離に入れられていない。ここでは、大衆は遅れた存在として単に改造の対象として扱われ、変革の主体としては想定されていないように思える。

以上において、本書の内容を紹介し、意義と問題点を指摘してきた。総じていえば、本書は最初にも述べたように、今日の学生・知識人の中国の現実に対するやり場のない悲痛な叫びともいえるものであり、内容的にはまだ荒削りであるが、現在の中国の知的位相を知る意味できわめて貴重な文献といえるであろう。今回の中国の民主化要求運動は武力により鎮圧された。しかし本書を通して、読者は、「ペン」が「剣」よりも強いことを歴史がいずれ証明するであろうことを、そのほとばしる情熱から感じとることができる。

（弘文堂・一九八九年・一八八頁・一三〇〇円）

国分　良成